

ローマ 8 章 26, 27 節における祈り

—パウロの宇宙論的終末論と苦難の中の友情—

小林高徳

1. 序

パウロは、いつでも、絶え間なく祈るようにと教えるだけでなく（ローマ 12：12、ピリピ 4：6、第 1 テサロニケ 5：17）、実際に各書簡を祈りから始め、また、日夜祈ることでその模範を示している（ローマ 1：9、ピリピ 1：3-5、第 1 テサロニケ 1：2、第 2 テサロニケ 1：11、2：13、コロサイ 1：3、3：10、第 2 テモテ 1：3 他）¹。祈りは、神に依り頼むことを信仰者たちにつねに想い起こさせるという意味で、重要である。このようなパウロの祈りに関する教えの中で、「何を祈ったらよいかわからない」というローマ 8：26 のことばは特異である。

パウロにとって信仰者たちの祈りは聖霊の働きと密接な関係があることは、ローマ 8：12-27 から明らかである。信仰者たちは「奴隷の霊」を受けたのではなく、「子としてくださる御霊を受けた」のであり、その「御霊によって」信仰者たちは、「アバ、父」と呼ぶことができる（15 節）。ガラテヤ 4：6 では、「あなたがたは子であるゆえに、神は『アバ、父』と呼ぶ、御子の御霊を、

¹ パウロの祈りの全体像に関する最近の考察については、R.N. Longenecker, 'Prayer in the Pauline Letters', ed., R.N. Longenecker, *Into God's Presence. Prayer in the New Testament* (Grand Rapids : Eerdmans, 2001), pp. 203-227 参照。

私たちの心に遣わしてくださいました」とパウロは言う。信仰者たちの心に遣わされた聖霊は、ローマ 8：16 で信仰者たちの霊と共に証言する。クルマンは、「アバ、父」との神への呼びかけは子とされた信仰者たちの祈りであるとみなし、パウロは信仰者たちの祈りにおいて聖霊が執り成すと確信していたと主張する²。

本稿は、信仰者たちの「弱さ」との関係で言及される祈りに関する不分明がパウロの宇宙論的終末論において持つ意味と、祈りとの関係で言及される聖霊の助け・呻き・執り成しが持つ友情論的な意味を明らかにすることを目的とする。

なお、8：26-27 の論の展開は、統語論上の対応関係は別として、以下のような二重のキアスムスとして見ることができる。

- A Ὡσαύτως δὲ καὶ τὸ πνεῦμα συναντιλαμβάνεται
 B τῇ ἀσθενείᾳ ἡμῶν
 B' τὸ γὰρ τί προσευξόμεθα καθὼς δεῖ οὐκ οἶδαμεν,
 A' ἀλλὰ αὐτὸ τὸ πνεῦμα ὑπερεντυγχάνει³
 C στεναγμοῖς ἀλαλήτοις
 C' ὁ δὲ ἐραυνῶν τὰς καρδίας οἶδεν τί τὸ φρόνημα τοῦ πνεύματος,
 A'' ὅτι κατὰ θεὸν ἐντυγχάνει ὑπὲρ ἁγίων.

以下の論考は、ここに見られる対応関係を踏まえたものである。

2. ユダヤ教黙示文学に特徴的な宇宙論的終末論とローマ 8 章

ローマ 8 章は、異論があるものの、旧約聖書と初期ユダヤ教の黙示文学に特徴的な終末論と多くの共通点を持っていると見るのが相応しいと思われる。パウロは、8：18 で「来るべき栄光」が「わたしたち」に啓示される (τὴν μέλλουσαν

² O. Cullmann, *Prayer in the New Testament* (Minneapolis : Fortress, 1995), pp. 72-74.

³ ここまでは、Andrzej Gieniusz, *Romans 8 : 18-30. "Suffering Does Not Thwart the Future Glory"* (Atlanta : Scholars Press, 1998), pp. 211 を参考にした。

δόξαν ἀποκαλυφθῆναι εἰς ἡμᾶς) と言い、19節では被造物が「神の子どもたちの啓示 (τὴν ἀποκάλυψιν τῶν υἱῶν τοῦ θεοῦ)」を待ち望んでいると描く。ここで用いられる動詞 ἀποκαλύπτειν とその名詞形 ἀποκάλυψις は、パウロの書簡においては通常、終わりの時の裁きの文脈でキリストの来臨に言及するために用いられる (2:5参照)。この文脈においても、キリストの再臨が前提されていることは疑いない⁴。信仰者たちの完成と全被造物の救いの完成は、創世記 3章における人類の始祖の罪に対する呪いとしての滅びの縄目からの解放であると描かれる。それは、同時に万物を受け継ぐ信仰者たちの受ける神の子どもとしての自由の中への解放であるとパウロは主張する (ローマ 8:21)。8:26-27は、多くの註解者が指摘するように、18節における「今の時の苦難」と「来るべき栄光」との対比を継承する⁵。

2.1 信仰者たちの祈りと黙示的な宇宙論的終末論

「今の時の苦難」(τὰ παθήματα τοῦ νῦν καιροῦ) は、単に「キリストの弟子であることに伴う一時的な苦しみ」ではなく、初期ユダヤ教の歴史的黙示文学⁶に見られる終末論における終わりの時の救いの完成の前起こると考えられていたメシア的艱難との類比で理解することができる⁷。しかし、他の黙示的終末論と異なり、パウロは終末的「今」をキリストによる救済の出来事としての十字架 (3:21) とそれに続く時として規定している (7:6、8:1)⁸。また、パウロは 8:14-17 で、信仰者たちが、神の子どもとして「神

の相続人」、「キリストとの共同相続人」(συγκληρονόμοι δὲ Χριστοῦ) として、全被造物を受け継ぐものとされていることを宣言する。さらに、キリストの共同相続人であることは、「身体があがない」としての復活と全地を受け継ぐことを意味するキリストと共に栄光を受けるために、キリストと共に苦難に与ること (εἴπερ συμπάσχομεν ἵνα καὶ συνδοξασθῶμεν) を意味すると説く。παθήματαは、πάσχωの受動態分詞の名詞形であり、すでに、「今の時の苦難」には、信仰者たちが今も続くキリストの苦難に共に与ること、キリストが「わたしたち」信仰者と苦難を共にすること (17 節) が反映されていると考えられる。

「今の時の苦難」は、22 節の「全被造物が、今に至るまで、共に呻き共に産みの苦しみをしている (πάσα ἡ κτίσις συστενάζει καὶ συνωδίνει ἄχρι τοῦ νῦν)」ことと概念上密接な関連があることは疑いない。クランフィールドは全被造物の「呻き」は、ユダヤ教黙示文学的に脚色されており、人類の始祖の墮落によって土地が呪われたこと (創世記 3:17) とそう遠くはないと主張した⁹。それに対して津村は、七十人訳聖書に基づいて *συστενάζει καὶ συνωδίνει* の起源として創世記 3:16 も加えるべきであると主張する。¹⁰

καὶ τῇ γυναικὶ εἶπεν

πληθύνων πληθυνῶ τὰς λύπας σου καὶ τὸν στεναγμόν σου

ἐν λύπαις τέξῃ τέκνα

「呻き」は、ここでは産みの苦しみの隠喩として理解される。津村はここから、「共に産みの苦しみをする (συνωδίνει)」の起源も創世記 3:17に求めるが、この洞察は正鵠を射ていると思われる。

他方、創世記 3:16-17への類比であることを根拠に、ローマ 8:22が終わ

文館、1998年)、216頁。

⁹ C.E.B. Cranfield, *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle to the Romans*. Vol. I. (Edinburgh : T. & T. Clark, 1975), p. 416. ローマ 8:18以降は、初期ユダヤ教黙示文学に特徴的な終末論の地平のなかで理解されるべきことは、ケーゼマン (前掲書、438-446頁) とヴィルケンス (前掲書、2.209-238頁) によっても支持されている。

¹⁰ D.T. Tsumura, 'An OT Background to Rom 8.22', *New Testament Studies* 40 (1994), pp. 620-621.

⁴ E.ケーゼマン、『ローマ人への手紙』(日本基督教団出版局、1980年)、438頁。

⁵ D.A. Black, *Paul, Apostle of Weakness. Astheneia and its Cognates in the Pauline Literature* (New York/Frankfurt am Main : Peter Lang, 1984), p. 194.

⁶ 「歴史的黙示文学」は、J.J. Collins, *The Apocalyptic Imagination. An Introduction to Jewish Apocalyptic Literature* (Grand Rapids : Eerdmans, 1998), pp. 4-5 による定義を反映したものである。本論では、「黙示的」は、文学類型の意味としてではなく、歴史的黙示文学に特徴的に見られる「黙示的終末論」という広い意味で用いている (*Ibid.* pp. 11-12 参照)。

⁷ Cranfield, *Romans*, 1.408f. 参照。迫害が終わりの時の艱難の一つであることについては、マルコ 13:9 と並行箇所参照。

⁸ U.ヴィルケンス、『ローマ人への手紙 (6-11 章)』EKK 新約聖書註解 VI/2 (教

りの時の艱難との関係を否定する議論がある¹¹。しかし 8:22 は、創世記 3 章の人類の始祖の墮落とそれに対する神の裁きの状態を振り返っているというだけでは不十分である。パウロは、21 節で被造物の「虚無」への服従が「滅びの束縛」からの解放と「神の子どもたちの栄光ある自由」に入れられるという(解説の ὅτι に注目)「希望に基づいて」(ἐφ' ἐλπίδι) いると言い、人類の墮落によって土地がのろわれたことを終末論的に解釈する。それに続く 22 節は οἶδαμεν γὰρ で始まるように、読者との共通の理解に訴えることにより¹²、滅びの束縛のなかにある被造物の希求(21 節)の根拠を提供するにすぎない。さらに、続く 23 節が、οὐ νόμον δέ, ἀλλὰ καὶ と始まり、全被造物だけでなく、御霊の初穂をいただいている信仰者たちの(同じ滅びの束縛の中にあつての)救いの完成を求めている「呻き」が語られることから、呻きには終末的待望が含意されているのは明瞭である。以上から 22 節は、被造物の滅びの束縛から解放の希求を擬人化したものであり、終末論的色彩が色濃く反映されていると言うことができよう。その意味で、人類の墮落以降、「被造物の虚無への隷属が今なお続いて」おり、その現実と神が全被造物に与えておられる目的が完成される栄光の時(に対する希望)との間の矛盾の中で被造物が極度の痛みを感じて呻めいている、というヴィルケンスの理解は適切と言えよう¹³。

墮落における人間と被造物の密接な関係は、旧約の預言者たちにとどまらず、初期ユダヤ教の黙示文学においても知られていた(例えば、第 4 エズラ 7:11-12)。特に、初期ユダヤ教の歴史的黙示文学において「産みの苦しみ」¹⁴は、

終わりの時の審きによって約束された祝福の時代が到来する前に起こると信じられていた終わりの時の艱難(θλίψις)、メシア的艱難を指し示す隠喩として用いられていた(例えば、クムランの『賛美の詩篇』(1QH) 11:7-12、第 1 エノク 62:4、第 4 エズラ 4:52-5:13、第 2 パルク 26:1-30:5、アブラハムの黙示録 30:1-32:8)¹⁵。神の審判を前にしての(人間の)悪の増大と、それに伴う人間世界と自然界の秩序の崩壊は、破局的なしるしとして描かれる(第 4 エズラ 5:1・12、6:12、9:1・2、第 2 パルク 20:1、25:2、ヨハネの黙示録 6:12-17)。新約聖書においても、十字架における受難がこの語で表現され(ヨハネ 16:21)、弟子たちが受ける迫害について終わりの時の艱難を指す「産みの苦しみ」(マタイ 24:8; マルコ 13:8)の文脈の中で語られる(マタイ 24:3-14; マルコ 13:4-13; ルカ 21:7-19。ヨハネ 16:2、33 も参照)。「今の時の苦難」(ローマ 8:18)が、35 節の「迫害」に始まる危機のリストに呼応しているとする、パウロも信仰者の受ける苦難を終わりの時の艱難と理解していたと考えられる。

さらに、黙示文学に特徴的な終末論の枠組みは、概念的に密接な関係にある、8:26-27 に続く文脈にも反映されている。地上における義人の苦難が、天の法廷における訴訟として描かれ、終末的審判において最終的には義人が勝訴するという主題はダニエル 7 章を通して主に後のユダヤ教黙示文学に継承されるが¹⁶、ローマ 8 章も苦難の中にある信仰者たち(35 節)の天の法廷における勝利(33-34、38 節)を宣言する。

以上の考察に従うならば、イエス・キリストの十字架と復活以降の「今のこの時」、信仰者たちの苦難は新しい意味を獲得する。それは、「終わりの時」のメシア的艱難であり、今も続くキリストの苦難への参与(ローマ 8:17)

Paul in the Greco-Roman World. A Handbook. London: Trinity International Press, 2003, pp. 172-197. esp., p. 190. この伝統は、非ユダヤ人キリスト者たちがローマ 8:22 を理解する際の接合点となったであろうが、終末的苦難と滅びの束縛からの解放という終末論的理解は欠けている。

¹⁵ ケーゼマン、前掲書、439-441 頁。ヴィルケンス、前掲書、2.212-215 参照。

¹⁶ 例えば、第 1 エノク 62 章、第 4 エズラ 13 章など。

¹¹ 例えば、Gieniusz, *Romans*, pp. 118f., pp.144-145; E. Adams, *Constructing the World. A Study in Paul's Cosmological Language* (Edinburgh: T & T Clark, 2000), pp. 179-183.

¹² Gieniusz, *Romans*, p. 149 参照。しかし、ギエニウスは、22 節は 20 節の虚無への服従のみの説明であると考え、パウロがこの文脈で強調している終末的希望の側面を被造物の呻きと産みの苦しみについては考慮していない。

¹³ ヴィルケンス、前掲書、2.221-222。

¹⁴ フレデリックソンによると、古代ギリシャの時代から、自然が擬人化され、人類の苦難に同情するという文学手法は「感傷的虚偽 (pathetic fallacy)」として知られているが、呻くことや産みの苦しみはその表現として頻繁に用いられる。David E. Fredrickson, 'Paul, Hardships, and Suffering', Ed. J. Paul Sampley,

を意味する。その苦難を通して神はキリストによってもたらされた人類を含む全被造物の救いは完成される。パウロが「わたしたち」と呼ぶ、信仰者たちの祈り（8：26-27）はこのような初期ユダヤ教の（歴史的）黙示文学に特有の宇宙論的終末論と類似する文脈に置かれている。

2.2 わたしたちの弱さ

信仰者たちの「弱さ」（ἀσθενεία）は、ダンによると、「この時代にある人の状態、創造主ではなくて被造物であること、その状態のゆえに人は神からの助けを必要とするその全ての必要を含めての被造性」¹⁷を指し示す。しかしこの「弱さ」は、直後の祈りに関する弱さだけでなく、「今の時」にある信仰者たちが味わう、総合的な意味での弱さを指している¹⁸。また、ダンの定義では、信仰者たちが全被造物と共に救済の完成を求めて呻き、産みの苦しみを共有するという「今の時の苦難」（18 節）を味わっているものとしての「弱さ」の終末論的性質が十分は反映されていない¹⁹。この点で、ヴィルケンスの次の解説は優れている。「現在なお持続している苦難と呻きの時の中にあって体験するキリスト者の弱さは、彼らの終末時の栄光への参与がまだ将来のことであり、彼らは被造物全体の滅亡性に現在与ることにおいてその将来からまだ引き離されている、という点にある」²⁰。

26 節後半の γὰρ に続く文が示唆するように、「わたしたち」の弱さを御霊が助けることの理由として、しかるべき祈りの内容に関する無知が加えられている。

2.3 τὸ γὰρ τί προσευξόμεθα καθὸ δεῖ οὐκ οἶδαμεν

この箇所は、「どのように祈ったらよいかわからない」と訳されることが多い（例えば、NEB、RSV、Phillips、新改訳）。しかし、ここでの祈りに関する無知は、祈り方（πῶς）についてでもなく、直接祈りの内容（τί）に関するもの²¹でもない。むしろ οὐκ οἶδαμεν の目的語は、冒頭の τὸ である。τὸ τί προσευξόμεθα καθὸ δεῖ は、「わたしたちが祈ろうとすること（内容）が相応しいか（whether what we would pray is proper）」分らないと訳することができる。とすると、ここでの不分明は、神ではない人間の被造性ゆえの限界性を表しているということができよう。また同時に、この祈りに関する不分明は、墮落と救いの完成の間にある逆説的緊張の中に置かれた信仰者たちの総合的な意味での弱さと関わっている。

この祈りに関する不分明について、ダンは、人間の置かれた弱さの状態のゆえに神の御心が何かを知らないからであると言う²²。マクレーは、将来の救いの完成の状態を知らないためにそこに到るために何を祈ったらよいか分からないことであると主張する²³。オベングは、全被造物が服している「虚無」のゆえの無知であるとみなす²⁴。ギエニウスは、全被造物と共有する苦難と、信仰者たちが必然的に経験する苦難から解放されるよう祈るべきであるかどうか分からないこととする²⁵。しかしながら、祈りに関する不分明は、必ずしも祈りの具体的な内容を特定することなく、信仰者たちが、人間が被造物であることから来る限界性のゆえに、終末的な艱難としての苦難の中で自らが発する祈りの内容が相応しいものであるかどうかに関するものであると思われる。

²¹ Cranfield, *Romans*, I. p. 421; Gieniusz, *Romans 8 : 18-30*, pp. 214-215.

²² J.D.G. Dunn, 'Spirit Speech. Reflections on Romans 8 : 12-27', S.K. Soderlund and N.T. Wright ed., *Romans and the People of God. Essays in Honor of Gordon D. Fee on the Occasion of His 65th Birthday* (Grand Rapids : Eerdmans, 1999), pp. 82-91, esp. p. 89.

²³ Contra G. MacRae, 'Romans 8 : 26-27', *Interpretation* 34 (1980), pp. 288-292, esp. p. 290.

²⁴ E.A. Obeng, 'The Reconciliation of Rom. 8.26f. to New Testament Writings and Themes', *Scottish Journal of Theology* 39 (1986), pp. 165-174, p. 167.

¹⁷ J.D.G. Dunn, *Romans 1-8*. WBC 38 (Dallas : Word Books, 1988), p.477.

¹⁸ Black, *Paul*, p. 191; Gieniusz, *Romans*, p. 213.

¹⁹ Gieniusz, *Romans*, pp. 212-214 参照。Peter O'Brien, *Romans 8:26-27. A Revolutionary Approach to Prayer*, *Reformed Theological Review* 44 (1987), pp. 65-73, esp., p. 72)も同様に、「弱さ」は「今の時の苦難」の一側面であると指摘する。

²⁰ ヴィルケンス、前掲書、2.227 頁。

2.4 まとめ

以上のように、パウロが語る信仰者たちの「弱さ」と祈りの内容に関する無知は、黙示文学的な宇宙論的終末論の文脈で発せられる「呻き」と関わっている。信仰者たちには、御霊の内住により死と滅びから解放される救いの完成の約束が与えられているとは言え、また、被造物も救いの完成という望みが与えられているとは言え（18-25節）、現実には、「今の時の苦難」が顕著な世界にあって、滅びの束縛の中で信仰者たちは被造物と共に呻いているとパウロは言う。滅びの束縛からの解放を求める呻きは、（被造物と）信仰者たちと「弱さ」を示すが、神の救いの約束が究極的に成就することを求める祈りの表現である。すなわち、信仰者たちが「弱さ」にあって、苦難の中で滅びの束縛からの解放を求め、祈ろうとすることの妥当性も分らず、被造物と共に呻いている。その呻きに聖霊の呻きが重ねられるとパウロは言うが、この相互参与の関係の考察に移りたい。

3. 第1世紀地中海世界における友情論と法廷

ローマ 8:26 における聖霊の執り成しが、法廷における弁護者の働きに呼応することは既に指摘されている²⁵。ギリシャ・ローマ世界における友情論の文脈で理解されるとき、信仰者たちの呻きが聖霊の呻きによって執り成すことの意味が明瞭になるであろう。

3.1 法廷における弁護者と苦難の中にある友への慰め

ギリシャ・ローマ世界における友情は、必ずしも平等の立場の人々の間のことだけではなく、解放奴隷とかつての主人の間のような上下関係においても、受けた恩恵とそれに対する返礼という形をとりつつ、広く実践されていた。特に、法廷における弁護は友情の重要な側面を担っていた。紀元第1世

紀の中葉、法廷における弁護者は、職業制度としては十分には確定されてはおらず、告訴者や被告者のために証人として弁明をするという任意の立場であった²⁷。このような弁護者は、たとえ被告より富や生まれにおいて低い地位にあっても *patronus* 他の名称で呼ばれた²⁸。法廷における被告と弁護人の関係は、パトロンとクライアント (*clientes*) の関係で理解され、市民社会における「友情 (*amicitia*, *φιλία*)」の発揚の場であった。そのようなパトロンとクライアントの関係において、クライアントである友を法廷で弁護することは、当事者の社会的名誉を高め、すでに得ている社会的地位を維持するだけでなく、さらに高い地位を獲得することに資すると考えられていた²⁹。

他方、ギリシャ・ローマ世界において、危急の時に友を助けることは友情のしるしであるとみなされていた。それを果たさないことは、友情に対する裏切りとみなされ、当事者の敵とさえ考えられた³⁰。プルタルコスは、『多くの友をもつことについて』(6[95c])³¹の中で、他の行為に加えて、法廷において友人を「弁護する」(*παρακαλεῖν*) ことや、葬りにおいて「共に悲しむ」(*συμπευθεῖν*) ことを友情の実践の例として列挙する。特に後者については、呻くこと (*στενάζειν*) と等置する。ここで注目すべきは、友情の実践を表す表現として *συν* 複合動詞が使われる点である。友情の表現において、「共に」喜び「共に」悲しむことは重要なことであった。

²⁷ このことは、初期ユダヤ教における法廷においても実践されていた。A.A. Trites, *The New Testament Concept of Witness* (Cambridge: Cambridge University Press, 1977), p. 21 参照。

²⁸ 他には、*advocatus*, *causidicus*, *togatus* などがある。*patronus* の意味については、*Oxford Latin Dictionary* (Oxford: Clarendon Press, 1976), p. 1311 参照。ローマ帝政時代における法廷と弁護者の役割については、J.A. Crook, *Legal Advocacy in the Roman World* (Ithaca, New York: Cornell University Press, 1995) 参照。

²⁹ Crook, *Legal Advocacy*, pp. 122-123. キケローは、『友情論』において、「有用 (*utilitas*)」に基づく友情と「友愛 (*amor*)」に基づく友情とを区別している。

³⁰ D. Konstan, *Friendship in the Classical World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), pp. 56-59.

³¹ ギリシャ語は、F.C. Babbitt, *Plutarch's Moralia*. Vol. II. The Loeb Classical Library (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1971) に従った。

²⁵ Gieniusz, *Romans*, pp. 216-217.

²⁶ K. Niederwimmer, 'Das Gebet des Geistes, Röm. 8,26f', *Theologische Zeitschrift* 20 (1964), pp. 252-265, esp. pp. 260-261.

ローマ 8 : 26-27 で聖霊は、滅びの縄目から解放されて救いの完成を待望する被造物と共に呻く信仰者たちの友として、弱さを助け、迫害など苦難によって訴えられている人々を神の法廷で弁護し、苦難を共にしていると描かれる。

3.2 「同様に御霊も助けてくださる」

ὡσαύτως、「同様に」という意味のこの比較の副詞は、先行する文脈のどこに呼応するのかについて議論がなされてきた。例えばマーレーは、直前の25節と関連させて、希望が苦難の中にある私たちを支えるように、聖霊が弱い私たちを助けてくださると理解する³²。クランフィールドは、ここで比較されているのは被造物と信仰者たちの呻き（22、23節）と聖霊の呻きであるとする。³³他方ダンは、対比を聖霊が主語になっている23節の間に見る³⁴。

最近スミスは、ὡσαύτωςは少し離れた16節との対比を促す、という見解を発表した³⁵。その見解に従うと、ちょうど聖霊が、私たちは神の子であると私たちの霊と共に証言するように、聖霊は私たちの弱さを助けて、執り成してくださるという対比が成り立つ。確かに「共に証言する」と「執り成す」はともに法廷用語であり、神の法廷における聖霊の働きが表現されていることを見ると、この指摘は興味深い。しかし、マルコ14 : 31、ルカ20 : 31、第1コリント11 : 25、第1テモテ2 : 9、5 : 25の例に見るように、ὡσαύτως δὲ καὶ、または、ὡσαύτως καὶの後には先に言及される人物か物事とは異なる主語が来るのが通常である。すると、「私たちの弱さを助ける」聖霊と対比される主体が何かを探さなければならない。「弱さを助ける」ことが友情のしるしであるとすると、ローマ 8 章において聖霊以外に信仰者たちの友として描かれているのは、神の

法廷で神の右の御座にあって友のために「執り成し」をするキリスト・イエスである。26節以前の文脈においてもキリストは、信仰者たちの友として描かれていると見ることが可能である。キリストは、信仰者たちが「栄光をも共に受けるために苦難を共にして」いる存在であり、信仰者たちは「キリストとの共同相続人」と描かれている（17節）。しかし、17節でのσυν複合動詞は友情関係を示唆するが、主語は「わたしたち」であり、ὡσαύτως δὲ καὶによって対照されている主語ではありえない。ヴィルケンスは、「御霊」と「呻く」の両語のゆえに26節は23節と呼応していると考え³⁶。しかし、23節の主語は「わたしたち」であり、26節の「御霊もわたしたちを助け」ることとは呼応しない。

ギリシャ・ローマの友情論と比較するとき、26節に呼応するのが22節であることが明らかになる。二重複合動詞 συναντιλαμβάνεταιの接頭辞 συνは必ずしも「共に」と訳される必要はなく、それ自体「助ける」という意味を持つ。「御霊も」(καὶ τὸ πνεῦμα) と副詞 のκαὶが用いられていることから、「私たち」を助ける存在にすでに言及されていることが読者には自明なことが前提されている³⁷。22節の「全被造物」が、信仰者たちと「共に呻き、共に産みの苦しみをしている」ことによって、信仰者たちの「今の時の苦難」を共有する友として描かれている。συναντιλαμβάνεταιに、七十人訳聖書の用例において示されるように「共に重荷を担う」という意味合いがあるとすると³⁸、信仰者たちの弱さを共に担うのは全被造物に加えて聖霊である、とパウロが理解していることになる。

3.3 法廷における友・弁護者

信仰者たちが何を祈って分からないながら、聖霊自身が執り成しをするとパウロは続ける。動詞 ὑπερευχόμενοι、「……のために執り成す」、の対象が触れ

³⁶ ヴィルケンス、前掲書、2.226。

³⁷ Gieniusz, *Romans*, pp. 223-224 は、Dunn, *Romans*, 1.476 がこの点を見過ごしていると指摘する。しかし、ギエニウスも「また同じように」と訳して、「聖霊」が先行する人、または、事物と対比されていることを見落としている。

³⁸ 出エジプト 18 : 22、民数 11 : 17。Dunn, 'Spirit Speech', p. 88 参照。

³² John Murray, *The Epistles to the Romans*. NICNT (Grand Rapids : Eerdmans, 1965), pp. 310-311.

³³ Cranfield, *Romans*, 1.420-421.

³⁴ Dunn, *Romans*, 1.476.

³⁵ G. Smith, 'The Function of 'LIKEWISE' (ὩΣΑΥΤΩΣ) in Romans 8 : 26', *Tyndale Bulletin* 49 (1998) pp. 29-38. この副詞との関連ではないが、クルマンも 26 節と 16 節における聖霊が信仰者たちの祈りに関わることの対比を見ている (Cullmann, *Prayer*, p. 76.)。

られていないが、並行している ἐντυγχάνει ὑπὲρ ἁγίων (27節b) から「わたしたち」、「聖徒」のためであることは明らかである。

「願う、祈る、嘆願する」を意味する動詞 ἐντυγχάνεινは、用例はわずかであるが七十人訳聖書において、神への祈りとして用いられている（詩篇79 [78]: 11）。しかし、ローマ8章では天の法廷の文脈（33, 34節）での聖霊の弁護者としての役割に言及していることは疑いない³⁹。この動詞は、元来、王の法廷で誰かを「訴え」たり、誰かの「執り成し」をするという概念を持っており、古典とヘレニズム期のギリシャ語においても、新約聖書（使徒25: 24、ローマ12: 2、ヘブル7: 25）でも法廷の文脈で頻繁に現れる⁴⁰。旧約聖書と初期ユダヤ教において、神の前で聖徒のための執り成しが天使や族長や予言者によってなされるという考えは広く知られていた⁴¹。ἐντυγχάνεινが法廷用語であるならば、聖霊は神の法廷で、訴訟の対象であるか、訴訟の主体である信仰者たちに代わって、審判者である神に執り成していることになる⁴²。信仰者たちは迫害をはじめとする苦難によって訴えられていると言えると同時に、彼らが「今の時の苦難」のなかで発する呻き⁴³が、神の法廷への訴えと理解されているとみなすことができる。信仰者たちの執り成しをする聖霊の働きは、ヨハネの福音書15: 26以降と16: 8-11におけるπαράκλητοςとしての聖霊が天の法廷で果たす「弁護者」の役割に呼応している（マルコ13: 11も参照）⁴⁴。

³⁹ Liddell and Scott, *Greek English Lexicon* (Oxford: Clarendon Press, 1996), p. 578; BGAD p. 341; Niederwimmer, 'Das Gebet', pp. 260-261.

⁴⁰ H. Balz, 'ἐντυγχάνω', *Exegetical Dictionary of the New Testament*. Vol. I. H. Balz & G. Schneider, eds. (Grand Rapids: Eerdmans, 1990), p. 461.

⁴¹ ヨブ 33: 23-26、トビト 12: 5、第1エノク 9: 3、15: 2、レビの遺訓 3: 5-6 他。詳細は、E.A. Obeng, 'The Origins of the Spirit Intercession Motif in Romans 8.26', *New Testament Studies* 32 (1986), pp. 621-632, esp. pp. 621f 参照。

⁴² Gieniusz, *Romans*, pp. 229-230 参照。

⁴³ 呻きと苦難とが近似関係にあることは、エピクテトス『語録』2.6.16-17 (ἀλλὰ κλάοντες καὶ στένοντες πάσχομεν ἢ πάσχομεν) を参照。

⁴⁴ Obeng, 'The Origins', pp. 627-630; 'The Reconciliation', pp. 168-171 参照。ルターはすでに、この箇所をヨハネ 14: 16 のパラクレートス、慰め主・弁護者

また、信仰者たちにはもう一人の友としての弁護者がいることがローマ8: 34から明らかである。「神の右の御座に着」いているキリストによる執り成し (ὁς καὶ ἐντυγχάνει ὑπὲρ ἡμῶν) は、天における神の法廷を前提している。法廷における「断罪」は、弁護と同様に弁護者の働きに属することであった（ヨハネ16: 7-11参照）⁴⁵。キリストは信仰者たちの友であることは、彼らが（「キリストの共同相続人」として）キリストと「苦難をも共にしている」（17節）という危急のときの友情を表す表現から見て取ることができる。

しかし、御霊による弁護は、キリストの法廷での弁護と相違がある。34節でキリストは神の右の御座にあって執り成しているのに対して、聖霊は信仰者たちの「内」にあって執り成している⁴⁶。パウロにおいて、キリストと聖霊の関係は非常に密接であることは知られているが、聖霊の呻きは信仰者たちの「内」にあって行われる行為であると同時に、信仰者たちの人格の中心である「霊」の「外」にあってなされる行為である。「私たちのうちにおられ、私たち自身ではない方が、神に私たちを弁護するのである。」⁴⁷

3.4 心を探り窮める方

御霊のστεναγμοῖς ἀλαλήτοις「言葉にならない呻き」と内容上呼応するのは、ὁ δὲ ἐραυνῶν τὰς καρδίας οἶδεν τί τὸ φρόνημα τοῦ πνεύματοςである。「心を探り窮める方」は、人の心を探る働きは主なる神に帰されていることが圧倒的に多いこと⁴⁸から判断すると、御霊ではなく神への言及である⁴⁹。ギエニウス

としての聖霊と重ね合わせて理解している。H.C. Oswald, ed., *Luther's Works*. Vol. 25. *Lectures on Romans. Glosses and Scholia* (Saint Luis: Concordia Publishing House, 1972), p. 368.

⁴⁵ 弁護者の働きは、今日の法廷における弁護人と検察官の両方の役割を併せ持った存在である。A. Harvey, *Jesus on Trial* (London: SPCK, 1976), p. 109 参照。

⁴⁶ E.A. Obeng, 'The Spirit Intercession Motif in Paul', *Expository Times* 95 (1983/84), p. 363 参照。

⁴⁷ P. Tillich, *Das Paradox des Gebetes*, 1957, p. 130. Niederwimmer, 'Das Gebet', p. 263 の引用より和訳。

⁴⁸ 第1歴代 28: 9、29: 17、詩篇 7: 9、139: 1、23、エレミヤ 17: 10 など。O'Brien, 'A Revolutionary Approach', p. 71 参照。

⁴⁹ *Contra* G. MacRae, 'A Note on Romans 8: 26-27', *Harvard Theological*

は、綿密な分析に基づいて、「(人間の) 心を探り極める方」(ὁ δὲ ἐραυνῶν τὰς καρδίας) は、審判者として人の心を審査する神を指し示すと主張する⁵⁰。旧新約聖書における οἶδα の用法に基づき、οἶδεν τί τὸ φρόνημα τοῦ πνεύματος は、父なる神の聖霊の思いに関する単なる知識ではなく、対象と深く関わる知識を指すと結論する。聖霊が信仰者たちの「今の時の苦難」の中で発する呻きに親しい友として(共に)呻きつつ執り成しをするその思いを、神も身近に経験する。それは、審判者なる神がその民の苦難に深くかかわる方であることを示している。「なぜなら」⁵¹、聖霊が聖徒のために執り成すのは、κατὰ θεὸν だからである。κατὰ θεὸν は、通常 καθὸ δεῖ (26節) と等しい意味であると見なされて、「神に従って」、または、「神のみこころにしたがって」(新改訳) と理解される。しかし、パウロがガラテヤ1:4にある κατὰ τὸ θέλημα τοῦ θεοῦ を用いないことから、むしろ同じ前置詞句が現れる第2コリント7:9、10、11に従って、「神に相応しく」と訳すことが適切である⁵²。その結果ギエニウスは、神は苦難の中にある人々の苦難を共に苦しむ神であり、「苦難に直面するとき、神ご自身が苦しむ者の呻きに参与し、その苦難を自らの苦難としてくださる」⁵³ と結論する。この解釈に従うと、審判者なる神も信仰者たちの苦難を共有する友と描かれていることになる。

3.5 呻きへの参与：苦難の中にある友への慰め

フレッドリクソンは、ローマ8:18-39には、ギリシャ・ローマ社会における苦難の理解と友情論が反映されていると指摘する⁵⁴。彼によると、信仰者たちが味わう「今の時の苦難」を共に苦しむのは、全被造物(19-22節)、聖霊(26節)、神(31-33節:27節参照)、キリスト(17節、34節)である。18

Review 73 (1980) pp. 227-230.

⁵⁰ Gieniusz, *Romans*, pp. 230-235.

⁵¹ 小詞 ὅτι の意味は困難であるが、新改訳や NRSV が、原因、理由の ὅτι と理解するのは正しいと思われる。

⁵² Gieniusz, *Romans*, p. 236.

⁵³ *Ibid.*, p. 237.

⁵⁴ David E. Fredrickson, 'Paul', pp. 187-190. 以下の論考は、この論文に

節における「苦難」が、部分的ではあっても⁵⁵、35節の、いわゆる「(危機的) 状況 (περίστασις) のリスト(Peristasenkatalog)」に呼応するとするならば⁵⁶、パウロは信仰者たちの苦難を共に担う多くの友がいることを描いていることになる⁵⁷。すでに、弱さを助けることも執り成しをすることも、聖霊が信仰者達の友であることを示していることを見た。それでは、「言葉にならない呻き」でとりなすことは、このような友情の文脈でどのような意味を持つのだろうか。

ギリシャ・ローマ世界にあって苦難の中にある友を慰めることは、友情の重要な要素であった。パウロとほぼ同時代のセネカやプルタルコスによる友を慰める書簡が残存している。逆境における友情についての古典的な言及は、アリストテレスの『ニコマス倫理学』⁵⁸に見られる。友は、「その友と共に悲しみ、共に喜ぶひと (τὸν συναλγοῦντα καὶ συγχαίροντα τῷ φίλῳ)」のことである(9.4.1)。人は順境の時も逆境の時も友情を求める。殊に、逆境の時にこそ友情が必要であるので、有益な友人たちが必要になる。また、順境の時も逆境の時も友人の存在は喜ばしいものだ。「苦痛を味わっている人々 (οἱ λυπούμενοι) は、友が共に苦しんでくれることにより (συναλγοῦντων τῶν φίλων)、苦痛は軽減される(9.11.2)」。他方でアリストテレスは、誰かと苦しみや悲しみを分け合うのを許すことは女々しい、とも言う(9.11.4)。

負うところが大きい。

⁵⁵ Gieniusz, *Romans*, pp. 101-111 参照。

⁵⁶ J.T. Fitzgerald, *Cracks in An Earthen Vessel. An Examination of the Catalogues of Hardships in the Corinthian Correspondence*. SBL Dissertation Series 99. (Atlanta: Scholars Press, 1988), pp. 10-11. プルトマンは、ローマ8:35をPeristasenkatalogの一例として扱う。R. Bultmann, *Der Stil der paulinischen Predigt und die kynisch-stoische Diatribe* (Berlin: Mayer und Muller, 1886), p. 71.

⁵⁷ フレッドリクソンは、危機のリストを友情論の文脈に導入したのはパウロ独自の貢献であると言う (Fredrickson, 'Paul', p. 188)。

⁵⁸ ギリシャ語本文は、H. Rackham, *Aristotle XIX. Nicomachean Ethics*. The Loeb Classical Library. (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1968)に和訳は原則として、加藤宏幸『ニコマス倫理学』『アリストテレス全集13』(岩波書店, 1988年)に基づいている。

フィロンは、「呻き」(στενναγμός)を集中的で極度な「痛み」(λύπη)と定義する(『比喩的解釈』3.211)。古代の道徳学者たち(プルタルコス「アポロニオスへの慰めの手紙」『モラリア』113A; エピクテトス、『語録』2.6.16-17)は、呻きを弱さと知性の欠如のしるしであるとみなした。キケローは、呻くことは不名誉な事であり、善良なる市民が避けるべきこととして描く(キケロー『トゥスクルム荘対談集』2.30-3, 42-50)。また、悲しみは哲人にとって、限度の中でなされ、自分でそれを抑制する限りにおいて、容認されることであるとみなされる(セネカ『倫理書簡集』63.1)⁵⁹。

ギリシャ・ローマ社会において、危機的「状況」(περίστασις)は、人の運命の浮き沈みと結び付けて考えられるようになった⁶⁰。人の外部で起こる変遷にどのように対処したらよいかという問いに対する答えは、学派によってもまた個人によっても理解は異なるが、内的な平穏を意味するἀταραξίαであった⁶¹。ギリシャ・ローマの賢者にとって、どのような状況をも、たとえそれが苦難や痛みであっても、理性によって乗り越えることができる「自制」が理想であった⁶²。

苦難の中にあるローマの信仰共同体に対してパウロは、ἀταραξίαに訴えることをしない。むしろ、友としての御霊の助けと呻きによる法廷での弁護に訴える。ここで語られる聖霊の呻き(26-27節)は、全被造物(19-22節)と聖霊の初穂を与えられた信仰者たち(23-25節)と続く一連の呻きの最終段階である。全被造物と信仰者たちが発する呻きは、「すでに」と「いまだ」という終末的ディレンマのなかにあって、前者は虚無からの解放を求めて、後者は身体のががないを求めて発する呻きであるのに対して、聖霊の呻きは、苦しむ

「わたしたち」と共に苦しむことから生まれる呻きである⁶³。それは聖霊が、「心の中で呻きながら、子にさせていただくこと、すなわち、私達のからだを贖われることを待ち望む」(23節)信仰者たちの呻きを共有することを意味する。聖霊のこの呻きは、信仰者たちの呻きを、つまり、呻きを発するほどの痛みを伴う苦難を自らのものとするを意味する。それは、苦難の中にある信仰者たちの親しい友として発する呻きなのである。

聖霊の「言葉にならない呻き」は、文脈上、異言による祈りとは無関係である⁶⁴。この文脈において課題となっているのは、信仰者たちが神の子供として、救いの完成をもたらすために集められる神の子どもたちが啓示されることを求めて呻く被造物をキリストと共に受け継ぐ者として果たすべき役割である。パウロは、「(危機的)状況のリスト」として列挙される苦難(35節)を終わりの時の「産みの苦しみ」とみなし、信仰者たちが経験するこれらの苦難をとおして救いの完成がもたらされると考えていたのであろう。救いの完成を見ていない、罪による死と滅びの中にあって「弱い」信仰者たちは、その祈りの内容さえも分らないとしても、友としての聖霊が「言葉では表せない呻き」をもって信仰者たちのために、神の法廷で信仰者たちを執り成し、弁護してくださるのである。

4. 結語

ローマ8:26-27は、迫害や他の社会的軋轢や苦難という「今の時の苦難」

⁵⁹ この区別については、Gieniusz, *Romans*, p. 225 に従った。

⁶⁰ Contra E. Käsemann, *Perspectives on Paul* (Philadelphia: Fortress, 1971), pp. 122-137 (ケーゼマン、前掲書、454-458頁); Cullmann, *Prayer*, pp. 76-80; G. Theissen, *Psychological Aspects of Pauline Theology* (Philadelphia: Fortress, 1987), pp. 315-320. Pace Cranfield, *Romans*, 1.421-423; Black, *Paul*, pp. 196-197; Gieniusz, *Romans*, pp. 222-224. ケーゼマン説の批判と、信仰者たちの呻きの実存的意味については、A.J.M. Wedderburn, 'Romans 8.26 - Towards a Theology of Glossolalia?' *Scottish Journal of Theology* 28 (1975), pp. 369-377 を参照されたい。K・ニーダーヴィーメルは、聖霊の祈りは救いを求めての呻きであり、終わりの時の出来事として終末論的な思想を反映していると主張する。K. Niederwimmer, 'Das Gebet', pp. 253-254.

⁵⁹ M. Wilson, "Subjugation of Grief in Seneca's 'Epistles,'" S.M. Braund and C. Grill, eds. *The Passions in Roman Thought and Literature*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997, pp. 48-67, esp. pp. 62-63 参照。

⁶⁰ Fitzgerald, *Cracks*, pp. 33-46 参照。セネカの和訳については、高橋宏幸「倫理書簡集 I」『セナカ哲学全集 5』(岩波書店、2005年) 242-247頁参照。

⁶¹ Fitzgerald, *Cracks*, pp. 52-53 参照。

⁶² この様な考えはパウロの同時代人であるセネカにも見られる(『賢者の恒心について』10.4)。J.W. Basore, *Seneca I. Moral Essays I*. The Loeb Classical Library. (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1985), pp. 78-81.

を経験しているローマの信仰共同体に対してパウロが提示した牧会的対応と
言うことができる。パウロは苦難を、キリストの贖罪と復活を経験した信仰共同
体が、その全被造物の救いの完成に向けてのプロセスにおいて経験する重要な
要素であるとみなすと同時に、祈りを苦難の中で信仰者たちが全被造物ととも
に発する呻きの文脈に位置づける。さらに、相互に苦難を共有し、共に呻き、
神の法廷において聖霊とキリストが弁護するという、信仰共同体、全被造物、
父・子・聖霊の神の間に繰り広げられる友情による慰めと励ましを与えている。

最後に、以上の論考から導き出される祈りに関するパウロの理解 (祈りの神
学) について考察して結語としたい。

- ① 苦難の中で発する信仰者たちの祈る内容が神への祈りとして相応しい
ものか分からないことは、祈ることが不可能であることを意味するのではな
い。むしろ、信仰者たちが、終末的意味合いを持つ苦難の中であって、滅
びの束縛からの解放を求める被造物と共に発する呻きは、存在の深奥から
の祈りであると言える。
- ② ポール・ティリッヒは、祈りを「三位一体の神の各位格間でのプロセス」
であるとみなした⁶⁵。聖霊の執り成しは、それが審判者なる神に対して
なされる執り成しであるゆえに、諸々の苦難によって訴えられている信仰
共同体を神の法廷へと引き上げる。終末的「今の時の苦難」の中であって、
何を祈ったらよいか分からない弱さの中にある信仰共同体は、救いの完成
を求めて友としての全被造物と聖霊と共に呻き、キリストも友として神の
前に執り成すという神の法廷におけるダイナミックな呼応関係の中に入
れられている。それゆえ、祈りは、三一神の位格間のプロセスにとどまら
ず、信仰者たちと全被造物と父・子・聖霊の神の間で、苦難の中の「友情」
として表現される、救済の歴史におけるダイナミックな連帯の出来事であ
る。
- ③ 信仰者たちの祈りは、被造世界からの離脱による救済を求めるものでは
ない。それは、キリストの十字架と復活を契機とする終末の時代における
「すでに」と「いまだ」という逆説的緊張の中で、全人類を含む全被造物

と苦難を共有する中でなされるものである。「アバ、父よ」と神を呼ぶ聖
霊を与えられた信仰共同体がささげる祈りは、滅びの束縛から神の子ども
たちの栄光にあふれた自由への解放を求める被造物の親しい友として共
に呻くことにより、今も続くキリストの苦難に参与し、救済の歴史 (プロ
セス) の完成において頂点に達する栄光としての身体の甦りと万物のキリ
ストとの共同統治 (*dominium mundi*) に与ることを目的とした業である⁶⁶。
その意味で信仰者たちの祈りは、神の救済の約束が成就することに対する
終末的希望の表現なのである⁶⁷。

- ④ 以上の考察は、祈りの対象としての神がどのような神であるかを明らか
にする。ローマ8章では、キリストが信仰者たちと共に苦難を経験し、聖
霊も苦難の中にある彼らの呻きを自らの呻きとともに父なる神に執り成
しをする。聖霊の思いを探り窮める神は、聖霊の執り成しをとおして伝え
られる信仰者たちと被造物の呻きと苦しみを身をもって知る神である。パ
ウロにとって父・子・聖霊の神は、現実と遠く離れたἀπαθείαの神ではな
く、苦難の中であって救いの完成を希求する全被造物と信仰共同体として
の教会と共に苦難しみ、共に呻き、救いの完成のために関与する神なので
ある。

(東京基督教大学助教授)

⁶⁵ Niederwimmer, 'Das Gebet', p. 265.

⁶⁶ Dunn, 'Spirit Speech', pp. 88–91.

⁶⁷ G.W. MacRae, 'Romans 8 : 26–27', p. 292.